

## 【KBS京都放送賞】

### 言の「葉」

滋賀大学教育学部附属中学校2年 山崎 百恵

「バカ。」小学一年生のとき、同じクラスの子に言われていた言葉だ。私の学校は幼稚園から中学校までつながっており、私は小学校から入学してきたことと、元からあまり人と話すことが得意ではないことから学校になかなかなじみずくにいた。同じクラスの子は度々私に悪意ある言葉を投げかけてきていて、当時の私はそういった言葉を言われる度に泣いてしまっていた。

当時その子はなぜ私にそんなことをしたのかは今でもなぞだけれど、私に暴言をはかれるのはもういつだったか忘れるくらいにピタリとやみ、私も学年が上がるごとに学校になじむことができた。

けれど、一年生のときからかわれるような言葉を言われていたのは今でも覚えているし、他人が言うことにびんかんになってしまう。一年生のときの経験が今の私に影響していることは確かだ。

私は、言葉は漢字のとおり「葉」だと思っている。葉は、光合成を行って糖を生成する役割がある。つまり、葉があるからこそ糖という養分がつくられ、それが花を咲かせるために使われる。花は、「心」だ。葉でつくられた養分は、花に影響してくる。私もそうだった。一年生のときに言われたことは、今でも私は忘れることができない。きっと、そのとき私の心に実った葉によりつくられている養分は私の花に影響を与えているのだろう。

心の花を、私たちは数えられないくらいの色や形で咲かせることができる。それと同時に傷つけることだってできる。また、自分の花でなくとも、他人の花も同じことがいえる。私も、他人に言われたことでその後の行動が変わったことは何度もあった。言葉で未来は変わるのだ。

ネットの「誹謗中傷」はその良い例だ。誹謗中傷とは、悪口や根拠のない嘘を言って、他人を傷つけたりする行為のことだ。最近自殺した芸能人も、誹謗中傷が原因で自殺したと新聞で読んだときには驚いた。その人は暴力を受けたわけでも事故に遭ったわけでもない。ネットに悪意ある言葉がたくさんかかれた事で生きることをやめてしまう。私たちの生活に染みついた「言葉」は、ときには命を脅かしたりもできるのだ。

それを特に感じるのが、ネットだ。前にある誹謗中傷のようにネットではリアルよりも簡単に悪意ある言葉がかきこまれている。心の花はどうだろうか。ネッ

トでの言葉によって花は咲くどころか枯れてしまうことだってある。枯れた花は二度と戻らない。それでもネットでは相手の顔が見えず花の状態が分からないからどんどん花を枯らす原因の悪影響の養分をつくる葉になってしまう。ネットでは「晒し」など誹謗中傷につながるものがたくさんある。小学校に入ったばかりの頃、横断歩道を渡るときには「右見て左見てもう一度右を見てから手を挙げてから渡る」というのがルールだった。もちろんそのときは立ち止まって一連の動きをして渡っていたが、いつしか止まらずそのまま歩いて渡ることが当たり前になっていった。これは横断歩道を渡ることに慣れてしまっただけで止まらなくても渡れるということが分かったことが原因だと思うが、ネットでも同じことがいえると思う。今、私たちの世代はZ世代と呼ばれていて「生まれたときからネットが普及している世代」と言われている。そんな身近にあるネットだからこそ私たちは今「立ち止まる」ということを忘れていてのではないか。何かをコメントする時、投稿する時、私たちは本当に一度他人を傷つけないかを考えているだろうか。もしかしたらこの言葉は相手を死なせる原因になるかもしれないということを私たちは意識できていないと私は思う。最初は誰だって慎重になる。「立ち止まる」ことができています。私たちには言葉を発する前に考えることが必要なのだ。

こうしてみると、「言葉は私たちの手に負えない恐いもの」だと考えてしまいが、もちろんそうではない。私たちが生きているのも、言葉があるおかげなのだ。会話することで支え合い、生きることができる。そのために私たちは自国だけでなく異国の言葉も学ぶのだ。

私たちは言葉で命をとられることがあるが、その前に私たちは言葉で生きることができている。勇気や絆が生まれることだってある。私も、つい傷つくことばかり思い出してしまうが、言われた言葉で「頑張ろう」「やってよかった」と思えることはいくらでもあった。

私たちは花を咲かせるため、良い影響の養分をつくる葉を育てなければならぬ。言の「葉」は私たちの花を咲かせる原因になる。私たちは花を咲かすため、どんな言葉をかけたらいいか考えなければならない。